「霜降（そうこう）」は、10 月 23 日頃から 11 月 7 日頃までの時期を指します。
暦の上では秋の最後の節気で、寒さが厳しくなり露が凍って霜が降り始める時期です。

この時期、京都では「時代祭り」、九州北部では「くんち」等、様々なお祭りが開催されます。

１．時代祭　10 月 22 日に行われる平安神宮の例大祭

「時代祭」は 5 月の「葵祭」、7 月の「祇園祭」とともに京都の三大祭りの一つです。

平安神宮の創建と平安遷都 1100 年を奉祝する行事として 1895 年(明治 28)に始まりました。
桓武天皇が 794 年(延暦 13)に長岡京から平安京に都を移した 10 月 22 日に「京都の誕生日」として、毎年開催されています。
行列は明治維新時代の維新勤王隊から時をさかのぼり、次いで江戸、安土桃山、室町、吉野、鎌倉、藤原、延暦と 8 つの時代にまたがって、それぞれの時代の衣装をみにまとった 20 の列、牛や馬を含む総勢約 2000 名におよぶ行列が秋の都大路を練り歩きます。

列の長さは２kmにも及びます。約 12,000 点にも及ぶ衣装、祭具、調度品は綿密な時代考証が行われて、細部に至るまで各時代を再現しています。
その豪華絢爛な時代絵巻は目を見張るばかり。
京都に受け継がれてきた伝統工芸技術の粋を感じることができます。
行列は、京都御所を 12:00 に出発し、丸太町―烏丸通り―四条通り―河原町通り―三条通り―神宮道を経て 14:30 ごろ平安神宮へ還御します。

九州北部の秋祭りの「くんち」は収穫を感謝して奉納される祭です。
「おくんち」と称される場合もあります。

「日本三大くんち」として次の「くんち」が有名です。
10 月 7～9 日　長崎くんち（長崎県長崎市）
10 月 23～24 日博多おくんち（福岡県福岡市）
11 月 2～4 日　唐津くんち（佐賀県唐津市）

２．博多おくんち
福岡市博多の総鎮守で、博多っ子からは「お櫛田さん」の愛称で親しまれている櫛田神社。
毎年 7 月に行われる奉納行事「博多祇園山笠」は、町中が熱狂する祭りとして有名ですが、毎年 10 月 23 日～24 日に行われる秋季大祭が「博多おくんち」です。

祭りの歴史は古く、1200 年以上前から始まったとされています。
毎年 11 月 23 日に行われ、その年の新穀を神様にお供えして感謝する新嘗祭(にいなめさい)が起源となっていますが、1953 年から時期を前倒しにして、名称も現在の博多おくんちに変わりました。

期間中は様々な神事が執り行われますが、牛に曳かれた神輿を中心とした行列が約 5km にわたって町を巡行する 24 日の「御神幸」が最大の特徴にして見所です。
例年、牛車の後ろに獅子頭や稚児行列、ミス福岡が乗ったオープンカー、ブラスバンドが続き賑やかな「おくんちパレード」を繰り広げ、博多の秋の風物詩となっています。

３．唐津くんち

唐津くんちは佐賀県唐津市で例年 11 月 2 日～4 日に開催される唐津神社の秋季例大祭です。
くんちとは「供日（くにち)」が九州の方言で訛ったものとも言われ、九州北部地方では秋祭りの事を「くんち」と呼ぶ地域が多くあります。
お供えの日と書くことから、秋の実りを神様にお供えして五穀豊穣に感謝するお祭りです。
最大の見どころが、江戸時代から続くお神輿の渡御と、お神輿にお供する個性豊かなヤマ（曳山）の数々。最古の曳山は、文政 2 年（1819）に氏子町の一つである刀町によって奉納された赤獅子といわれています。
それ以後、明治 9 年までの 57 年間に 15 台の曳山が製作されました。
そのうち 14 台が 150 年近く経った今も大切に受け継がれ現存しています。
祭りは 1 日目の夜 7 時半の宵曳山（よいやま）から始まります。
堤灯の灯りがともった曳山が、旧城下町を巡行しながら唐津神社に集合する光景はとても幻想的です。
2 日目は「御旅所神幸（おたびしょしんこう)」が行われ、唐津くんちの最大の見どころである「曳き込み」を目当てに、県内外から大勢の見物客が訪れます。
お神輿と曳山が目指すお旅所は西の浜にあるため、車輪が砂地に埋もれなかなか進みません。
曳子たちの掛け声は最高潮に達し、豪快に曳き込む様子はまさに圧巻です。
曳山は一番曳山の刀町・赤獅子から十四番曳山の江川町・七宝丸まで、制作年代順に並んで旧城下町を回ります。
3 日目の翌日祭では、御神幸とほぼ同じ巡路で旧城下の東西約 8km を「エンヤ、エンヤ」「ヨイサ、ヨイサ」という威勢のよい掛け声とともに回ります。

秋と言えば、実りの秋。秋を代表する果物と言えば、柿ですよね。
そして柿と言えば、明治の俳人・正岡子規

～柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺～

これは俳人で歌人の正岡子規が明治時代に詠んだ一句です。
子規は 1895(明治 28)年 10 月 26 日に奈良の旅先で、この句を詠んだといわれます。

法隆寺境内鏡池の傍にある同句の句碑　　夏目漱石「鐘つけば銀杏散るなり建長寺」

若くして世を去った子規が34歳の生涯で遺した20万以上の俳句の中でも特に有名な句です。
同世代の夏目漱石が詠んだ、次の句が子規の感性を刺激した可能性が指摘されています。

「柿食えば　鐘がなりけり　建長寺（けんちょうじ）」

漱石は禅の修行のため鎌倉に滞在していたことがあり思い出の深かった建長寺での句です。

子規は 28 才のとき日清戦争に記者として従軍、結核に罹ります。
明治 28 年 5 月 14 日、帰国するため佐渡国丸で大連から日本に向けて出発。船内で血を吐き体調を崩し、神戸病院に入院後、須磨保養院に移り、退院して故郷松山へ移動。
松山中学の教員として赴任していた大学の同級生、夏目漱石の下宿に 50 日ほど居候。
漱石は 2 階、子規は 1 階に棲み、子規は松風会のメンバーに漱石を加えて句会三昧の日々を過ごしていました。
子規が松山に居た期間中に漱石は愛媛の海南新聞に上記の俳句を投稿しています。
子規は当然この俳句を知っていたと思われます。
子規は東大予備門において夏目漱石と同窓生であり漱石とはとても仲がよく子規が病に患ってからも療養生活の看病を必死にしていたといわれています。
『柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺』は療養生活の世話や奈良旅行を工面してくれた漱石に対してのお礼の句であるといわれています。

子規はその後病状がよくなったため 10 月下旬に帰京しますが、その途中で奈良に数日滞在。
法隆寺を訪れ、この句を詠みました。
東大寺転害門の隣に宿をとった子規は夕食後に宿の人に御所柿を所望し、次々に食べました。
この句は、法隆寺境内の鏡池のほとりに句碑が建てられています。
柿の文化作品を作りたい子規が、東大寺の鐘と柿、法隆寺の茶屋、漱石の俳句を全て取り入れて、俳句の最高傑作を生みだしたのだと考えられています。
法隆寺の句が有名になったとき子規はすでに亡くなっていました。

全国果樹研究連合会カキ部会は、この句を詠んだことにちなみ、10 月 26 日を「柿の日」として制定しています。